資料3

「アニマルウェルフェアに関する飼養管理指針」における事項ごとの達成目標の検討について（第二版）

令和7年12月26日

農林水産省

目　次

1. 前回の検討状況
   - 指針の『実施が推奨される事項』について、具体的にいつまでの実施を目指すのか（達成目標）を検討

2. 本日の検討内容
   - 「達成」水準の具体的数値
   - 暫定目標の設定

3. 参考

1.「達成」の水準に用いる指標について

- 推奨される取組が普及した状態となる「達成」の状態について、R6本格調査の結果を基に妥当な「達成」水準を設定する際の指標として、「あてはまる」と「ややあてはまる」の割合に着目した案を提示。

調査結果における「あてはまる」「ややあてはまる」の回答割合に注目した「達成」水準案（前回、農水省から提示）

	あてはまる計（「あてはまる」+「ややあてはまる」）	うち、「あてはまる」
案の1	95%以上	80%以上
案の2	84%以上	50%以上

検討委員の意見の概要

- 「達成」の指標としては、AWに意識して取り組んでいる者として考えられる「あてはまる」と「ややあてはまる」の回答の合計（「あてはまる計」）の割合のみを指標とすれば良いのではないか。
- 「あてはまる」のみの割合を指標化する必要はないが、項目によっては割合に差が認められることから、その変遷を分析することが必要。

委員意見を踏まえた対応（案）

- 「あてはまる」の割合にも配慮しつつ、指標としては「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計値のみを採用したい。

2.「達成」水準の値について

- 当該事項について取組の普及が十分に認められる状態を「達成」としたうえで、その基準となる数値を2案提示。

「達成」水準案として2つの数値案を提示（前回、農水省から提示）

	あてはまる計（「あてはまる」+「ややあてはまる」）	うち、「あてはまる」
案の1	95%以上	80%以上
案の2	84%以上	50%以上

検討委員の意見の概要

- R6に調査した事項のみを考えれば、95%という高い水準を目指しても問題はないが、例えば94%の場合にAWに取り組めていないことになるのは違和感があるため、普及が進むのであれば具体的な数値目標を設定しなくても良いのではないか。過去からの取組状況の変遷が分かれば、95%が妥当かどうかの判断もしやすいのではないか。
- 95%は非常に高い数値であり再考の必要がある。数値の参考とした国交省等の汚水処理施設の普及目標は、公共サービスとして国民生活に必須な内容であり、本件で参照するには適さないだろう。
- 最終的な目標値としては95%かもしれないが、短期的な視点で考えて、最初に設定する目標としては84%程度が妥当ではないか。
- 84%はイノベーター理論を根拠としているが、消費者を含めて皆様に理解される数値か疑問。
- 最終的な目標値は95%くらい高くあるべきだが、調査の実施体制（設問の工夫、任意回答等）を踏まえれば、まずは10%単位など大まかに捉えて行くことを考えても良いのではないか。
- 最終的な目標値を決めた上で、当面の数値目標を立てるという方法もあるのではないか。

委員意見を踏まえた対応（案）

- 見直した案（後述）にて改めて議論いただきたい。

3.「達成」までの道のりが長い事項に対する中間目標の設定について

- 事項によっては「達成」までに長期間を要するものが想定される中、目標を設定する期間を5年とするのであれば、暫定的な目標を設けることを提案し、その目標の目安について意見照会。

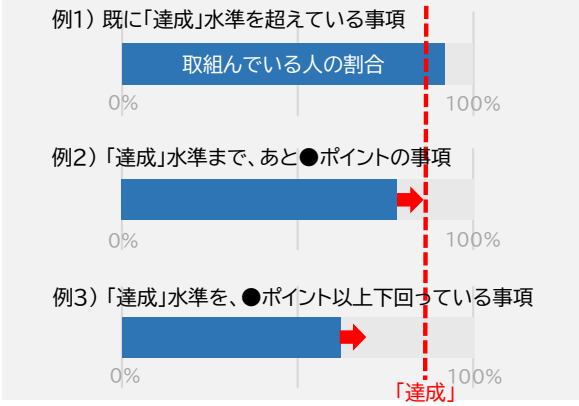
中間目標の設定に当たり基準となる考え方の案を提示するとともに、具体的な基準値について意見を照会（前回、農水省から提示）

取組期間を5年としたときの目標設定例

① 「達成」水準まで●ポイント以内の現状にある項目（水準を超える項目を含む）は、「達成」水準を目標値とする。

② 上記に当てはまらない場合は、「現状値＋●ポイント」で目標を仮置き※。

※ 現状や課題・対策などを含めて、重点的に取組む項目を決めるなど、柔軟に検討していく考え。



- 前回検討会では「達成」水準に意見が集中したこと、その「達成」水準が固まらない中では暫定的な目標についての議論は更に難しかったためか、委員から具体的な意見は出なかった。
- 一方で、委員から「当面の目標を立てる」ことへの提案がなされるなど、「達成」以外の目標値を設定すること自体には一定の賛意が示された。

前回検討会を踏まえた対応（案）

- 見直した案（後述）にて改めて議論いただきたい。

4. 目標を設定する期間について

- 事項ごとに適切な年限を設定することの難しさや、目標達成の進捗確認の観点などから、事項によらず一律の目標期間を設定する案を提示。

目標の検証スケジュール例（前回、農水省から提示）

期間	参考事例
短期（～3年）	補助事業の成果目標（1年～数年程度）
中期（5年）	食料・農業・農村基本計画等（5年ごとに見直し）
長期（10年～）	EU規則における採卵鶏指令（12年の移行期間）

検討委員の意見の概要

- AWは常に情勢が変化していく分野であることを踏まえれば、5年ごとに目標を見直すのが妥当。
- 長期で取り組むべき事項もある中で、5年ごとに目標の見直しを行いつつ、比較的短期間での取組が可能な事項に絞って重点的に普及を図るやり方があっても良い。

委員意見を踏まえた対応（案）

- 目標を設定する期間としては5年間を基本とし、次回の食料・農業・農村基本計画等の見直し時期とタイミングを揃えることとし、まずは令和12年度（2030年度）を目標年度として設定したい。

5. 目標期間内における調査時期（頻度）について

- アンケート回答に係る関係者の事務負担等を考慮し、隔年を軸とした調査スケジュールを提示。

目標期間を5年とした場合の調査スケジュール例（前回、農水省から提示）

	R6	7	8	9	10	11	12
調査年度	●（R6本格調査）		○		○		
調査の結果公表年度		●（R6本格調査）		○		○	
目標年度		◌					○

検討委員の意見の概要

- 調査の間隔を長くしてしまうと、取り組むべき事項を失念する懸念もあるので、隔年を軸とする原案が妥当ではないか。
- 隔年での調査で構わないが、AWに取り組む生産者が増えているのであれば、その事実が分かるようにすることが重要。
- 隔年の調査で良いと思うが、回答のしやすさに配慮した調査設計をしているのであれば、毎年の調査も可能ではないか。

委員意見を踏まえた対応（案）

- 調査の実施には、地方公共団体や関係団体等の事務負担も生じることや、取組の進展には一定の時間がかかること等も踏まえ、第1回検討会で提示した原案の隔年での実施を採用したい。

6. 畜種ごとの議論の進め方

- 畜種ごとの専門委員を加えて具体的な議論を行う会について、毎回の参加となる検討委員の負担等を勘案し、複数の畜種を同時に取り扱い開催回数を削減する工夫を提案。

複数畜種をまとめて議論する際の例（前回、農水省から提示）

例1）3回（乳用牛・肉用牛、 採卵鶏・肉用鶏、 豚・馬）

例2）2回（乳用牛・肉用牛・馬、 豚・採卵鶏・肉用鶏）

検討委員の意見の概要

- 豚と馬を併せて検討することは、畜種の性質からも相応しくないのではないか。
- まとめるのであれば、<u>大家畜と中小家畜に分ける方が妥当</u>だろう。
- 畜種ごとの開催が良いかと思うが、採卵鶏と肉用鶏など、まとめた方が委員負担の点では望ましい。

委員意見を踏まえた対応（案）

- 複数畜種をまとめて議論することに一部否定的な意見も見られたが、畜種ごとに議論を実施すると、畜種間の横並びが取りにくく、検討委員による意見のとりまとめが難しくなることが予想されるため、必要に応じて2回目の開催も視野に入れつつ、まずは大家畜と中小家畜の2回に分けて実施することとしたい。

本日の検討内容（前回検討会からの継続協議）

1. 「達成」水準の具体的数値

- 取組状況の調査結果において、「あてはまる」等の割合がどのような状態を「達成」（普及した状態）とみなし、目指していくべきか。

2. 暫定目標の設定

- 「達成」水準や目標年度を踏まえた暫定的な目標をどのように設定すべきか。

前回及び今回の検討を踏まえ、議論のたたき台となる目標の素案を作成し、畜種ごとの議論に移ることとしたい。

「達成」水準の具体的数値に対する見直し（案）

参考とした意見

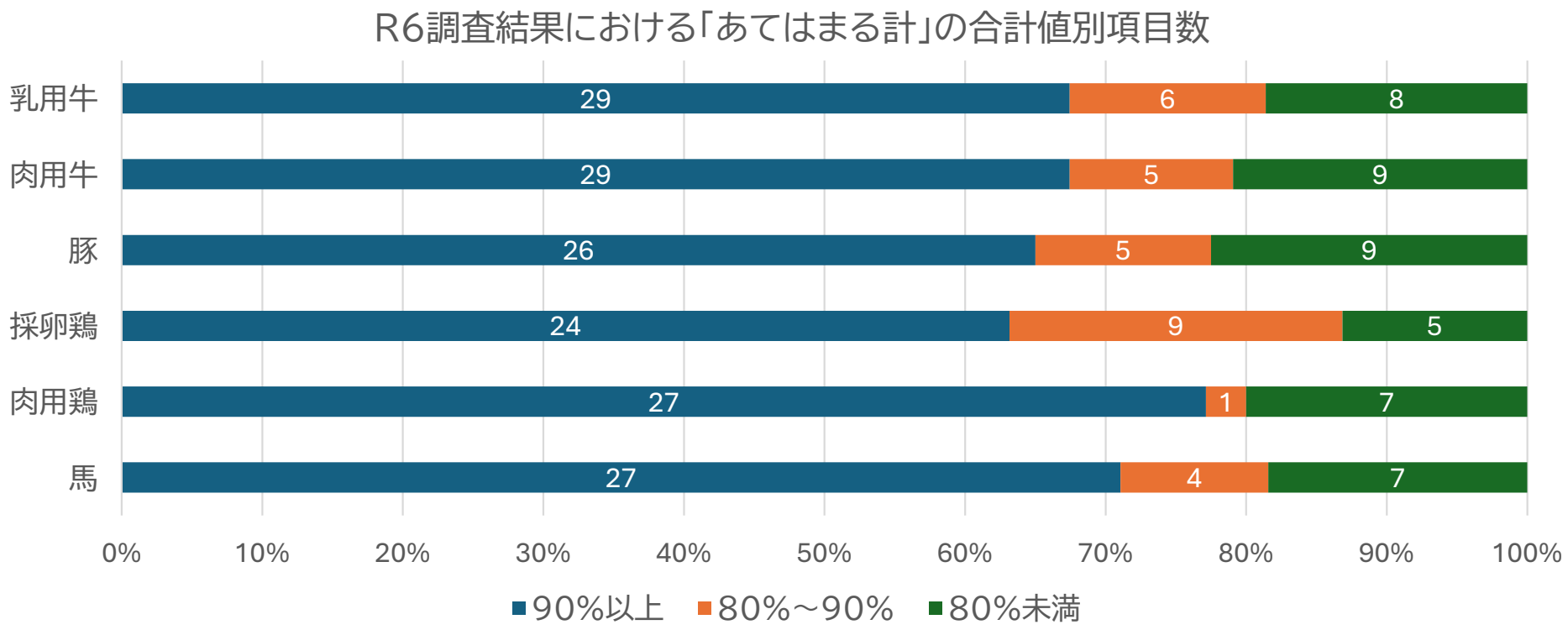
- 95%は理想的であるが、達成を目指すには困難度が高すぎる。
- 当面の目標としては84%程度が妥当だが、数値の説明に苦慮する。
- 調査方法等を踏まえれば、精緻な捉え方ではなく10%程度の括り方でもよいのではないか。

- 最終的な「達成」基準としては、95%を目指すこととしながらも、まずは90%を閾値としてはどうか。
- 将来的に補助事業のクロスコンプライアンスの導入を検討するという当初の考え方を踏襲すれば、90%を満たしたものをクロスコンプライアンス導入によって95%に引き上げるという考え方もできるのではないか。

暫定目標に対する見直し（案）

- 5年後に目標90%を超えることが現実的ではない項目については、モチベーションの観点からも、実現可能性の見込みがある数値目標を専門委員と議論の上で別途設定してはどうか。
- その際、議論のたたき台として、現状から10pt程度の向上を基本とした暫定目標値を仮置きしてはどうか。

達成水準（案）とR6調査結果との関係



- 現状値（R6調査結果）を踏まえれば、「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計割合の「達成」水準90%（仮）に対し、既に6割以上の項目が水準を超えている状況。また、同値が80%以上の項目数では、およそ8割を占める状況にある。

- 10%単位程度で状況を捉えて行くとすれば、現状で80%を超える項目（上図の青と橙）については、「達成」水準である90%を目標として掲げても良いのではないか。
- 畜種別の議論では、80%を下回るような項目（上図の緑）を中心に「90%」ではない暫定的な目標値の設定について議論してはどうか。（たとえば、現状値が50%の項目は60%を目標とするなど。）

本日の検討内容のまとめ

1. 「達成」水準の具体的数値

「あてはまる」と「ややあてはまる」の合計である「あてはまる計」が90%に達することを当面の「達成」水準としてはどうか。

2. 目標設定の方向性

現状値（R6調査結果）の「あてはまる計」が80%を超える項目は90%の達成水準を目指すこととし、80%を下回る項目については10pt程度の向上を基本とし、畜種別の議論にて、特に軽重が必要な項目について別途検討を行ってはどうか。

➢ R6調査の結果と目標設定（仮）の例（乳用牛）

項目	あてはまる計の割合	R12目標（仮）
1日1回以上、牛の飼養管理や健康状態を確認している。	99.2%	90%
除角は、角が未発達の時期（遅くとも生後2か月以内）に行い、それ以降は、常に獣医師による麻酔薬の投与の下でおこなっている。	81.4%	90%
断尾は行っていない。	87.7%	90%
繋ぎ飼い方式で飼われている牛は、繋がれていない状態で運動が十分にできるようにしている。	46.6%	55%
災害による影響を可能な限り小さく抑えるため、危機管理マニュアル等を整備している。	60.8%	70%

達成目標の設定後の評価・検証について

第1回検討会での委員意見

項目ごとの目標設定と達成状況の確認に加え、総合的な評価をどのように示すのか。

- 農林水産省としては、義務ではない推奨事項として指針を示したところではあるが、その水準は国際基準に則っており、実施が望まれるボトムラインとの認識。
- 全項目に対する達成できた項目の割合のみを基準として示すことは、推奨事項の軽重が同列で扱われることとなるため、適切ではないと考えている。

➢ 達成目標の検証時における評価の例（想定）

✓ 達成水準（90%）を目標とした30項目のうち25項目が目標達成。
そのうち目標未達の5項目については、実施割合が80%から85%に高まるなど取組に一定の進展が見られた。

✓ 暫定目標を個別に設定した10項目のうち6項目が目標達成。
そのうち目標未達の4項目については、1項目で実施割合の向上が確認された一方、3項目では目標設定時から取組の進展を確認するまでには至らなかった。

✓ 目標未達の要因としては、～や～などが考えられるため、今後は～への支援等を検討する必要がある。